

移動ド唱法を活用した合唱指導についての一考察

金原 聡子

音楽教育講座

A Study on Chorus Instruction with Singing Method of Movable-do System

Satoko KINBARA

Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

I. はじめに

小学校学習指導要領に「相対的な音程感覚を育てるために、適宜、移動ド唱法を用いること」と明記されているにもかかわらず、現在の学校教育の現場では移動ド唱法を用いて授業が展開されることは少ない。それは、日本に元々移動ド唱法が根付いておらず、指導する側にとっても理解が難しく、授業に用いるのは垣根の高いものなのだと思われる。

しかし、指導要領に書かれているように、移動ド唱法を使う事に慣れていくと、相対的な音程感覚を育てることができ、ハーモニー感覚が育っていく。

移動ド唱法とは、音の高さに関係なく、楽曲の調によって「ドレミ」の位置を移動させて音を読む歌い方である。音を絶対的な高さで読むのではなく、その調の主音は必ず「ド」とし、他の音は主音に対する相対的な音と捉えて、「ドレミ」を歌う。利点としては、音の機能が感覚的に掴みやすいこと、音程感覚が育ちやすい、ハーモニー感覚が育つ、移調がしやすい事などがある。デメリットは調によって主音の高さが変わるの、慣れなければ譜読みが難しい。

しかし、例えば、小・中学生がリコーダーや鍵盤楽器を演奏する時には、固定ドで指導したほうが、断然理解しやすいので、移動ドだけを推し進めるといふわけにはいかない。だが、両方のいい所を指導者側が十分に理解し使い分けられる力を持つことは、教育時に必ず良い効果をもたらすに違いない。

昨年、本学三年生の合唱の授業を受け持つことになったのだが、その時に取り入れた移動ド唱法のエクササイズ教本、松下耕作曲の「合唱のためのエチュード」を歌わせたとき、学生たちにとって、移動ド唱法は馴染みがないので非常に歌いにくそうであった。そこで、半期を通じて取り入れ、どのような効果や変化があるかアンケートを取るとともに考察した。

II. 研究の方法

まず、合唱の授業を受講した学生にアンケート調査を行う。そして、授業実践し、学生たちの技術の習熟度を観察、また授業最終回にアンケートを実施して、意識の変化を考察する。

1. 合唱の授業について

先述したように、この取り組みは理論の授業ではなく、合唱の授業で行った。本学は全16回の授業である。その限られた時間での取り組みなので、移動ド唱法のみを取り上げることはできない。本学音楽教育専修のカリキュラムでは、一年次は全員が声楽の授業を必修で取る。しかし、二年次以降は声楽と器楽に分かれるため、二年次以降はこの合唱の授業と、四年次の選択科目である合唱指導法の授業でしか歌わない生徒も出てくる。しかし、将来義務教育の音楽教員になるものにとって、声楽はとても大切なものであり、臆せず歌えるようになって欲しい。その思いもあり、合唱の授業でも発声法を一年次に引き続き意識させるようにしている。ただ声を出すだけではなく、子供たちを指導することを想定した声の出させ方も演習している。また、実際にどのように合唱曲を仕上げていくのかを知るために、四曲練習し仕上げた最後の授業で演奏する。通常であればランチタイムコンサートを開くが、コロナ禍のため、動画を取ってYou-tubeにアップした。このように発声法や、指揮法の簡単な導入、合唱曲を仕上げるなどの事もあるので、実際に移動ド唱法のエクササイズが出来たのは授業の冒頭15分づくくらいであった。

2. 実践の概要

理論の授業ではないが、ある程度の理解がないと固定ド唱法に慣れている学生には難しいので、最初に「移

移動ド」について説明を行う。そこから徐々に頭で理解するだけでなく体感できるように進めていく。合唱に慣れていない学生も多いため、移動ド唱法にも関係してくるが、合唱の基本的なハーモニーの作り方から進めていく。具体的な計画は以下の通り。

- ①「主音」「属音」の感覚をつかんでもらうために、最初にIの和音を三声で鳴らす練習をする。
- ②簡単な三声のカデンツァを歌う。その時に「ドレミ」で歌うが、転調してもその「ドレミ」のまま歌う。
- ③簡単なカノンを利用して、移動ド唱法の説明を繰り返しながら、移動ド唱法に慣れるよう練習をする。
- ④松下耕作作曲「合唱のためのエチュード」より練習曲を用いて練習する。この曲集は、移動ド唱法のデメリットである、譜読みの難しさを軽減するために、楽譜の上に「移動ド」のドレミがすでに書かれている。なので、読譜が難しい学生でも比較的スムーズに「移動ド」で読むことが出来る。

Ⅲ. 実践と考察

【第一回目】4月14日

ガイダンスも兼ねてアンケートを実施し、学生たちの移動ド唱法への理解度を探った。「移動ド」と「固定ド」の違いについての説明をした。

初回という事もあり、学生の反応は良く分からないし難しそう、できるかどうか不安だといった声があった。

【第二回目】4月21日

ピアノなしで、合唱できれいにハモったIの和音を鳴らす練習をした。バリトンに主音を出してもらい、その倍音から聞こえてくる第五音を感じて、ソプラノはそこにはまる第五音が聞こえてきたら声を出す。五度が決まったら、そこに入るべき第三音を感じて、聞こえてきたら第三音を出す。Iの和音がかっこいい感じが分かったら、主音を半音ずつ上げていき、ピアノなしで和音を感じて出す練習をした。

合唱経験が少ない学生が多いため、ピアノを使わないでアカペラで声を出すことに、最初のうちは戸惑いを感じたが、徐々に声を出せるようになった。

【第三、四回目】4月28日、5月12日

前回同様、ピアノを使用しないで、出した主音から音を取るように簡単なカデンツァや、カノンを練習した。

二回目よりもさらにゲーム性を持たせたカノンで、声を出す事が楽しいと思えているようであった。しか

し、まだまだ声を出すことが恥ずかしい、不安だといった学生も多く見られた。

【第五、六、七回目】5月19日、26日、6月2日

松下耕作作曲「合唱のためのエチュード」の中から「あめ」「き」を用いて、移動ド唱法の重唱を練習した。どのパートも歌えるように、パートを入れ替えながら練習した。

長年習い事などでピアノを訓練してきたような「固定ド」に慣れている学生や、さらに絶対音感がある学生にとっては、楽譜に書かれている音名と「ドレミ」が一致したものとして認識している。なので、楽譜に書かれた音の高さと違う「ドレミ」で歌う事は、彼女たちにとって難しいを通り越して、非常に困難な事のように見受けられた。授業後ある生徒が、「絶対音感があるので、とても気持ち悪い」と言っていた。

【第八回目】6月9日

移動ド唱法と固定ド唱法について各自で調べ、今までやってきた感想を提出してもらった。

プラス意見

- ・調性を捉えやすく、音が重なった時に音の間隔が捉えやすかったり、和音の機能が分かりやすかったりして、合唱やアンサンブルを練習する上で重要な練習方法になると感じた。
- ・小学校において、まだ児童が成長の段階でこの唱法を取り入れた授業をしたら、とても音程に敏感になると思った。

マイナス意見

- ・今回、初めて知ったので、とてもややこしいと感じた。目で分かっても頭が追いつかない。
- ・固定ド唱法に慣れているため、楽譜に誘導がついていても違和感が大きく、とても歌いづらかった。授業で毎回やっているが、いまだにスムーズに歌う事ができない。

全授業の半分まで来たが、一応頭ではなんとなく良いものかもしれないと感じている学生が増えてきたが、「固定ド」になれているため、まだまだ実際には歌うのは難しいという意見が多かった。

【第九、十、十一回目】6月16日、23日、30日

松下耕作作曲「合唱のためのエチュード」の中から「くじら」「みずのなか」を用いて三声の合唱の練習をした。

三声になるとハーモニーも複雑になって、また、こ

の「みずのなか」は拍子記号もなくリズム感が取りにくかったようで、難しかったようだ。ねらいとしては、お互いの呼吸を良く感じて合わせて歌えるようになってほしかったのだが、移動ド唱法の事で精一杯なので、もっと拍が分かりやすいものにしたほうが良かったと思った。

しかし、少しずつ学生たちも慣れてきている感じが見られるようになってきた。学生からハーモニーが聞きやすくなってきたという感想も出てきた。

これ以降の授業は、最終の発表に向けてピアノ伴奏つき合唱曲の練習を主にを行い、これまでのような移動ド唱法の練習は行わなかったため、ここでは割愛する。

Ⅳ. アンケート結果と考察

初回と最終回に、学生達の移動ド唱法に対する意識や、合唱活動への経験値を調査するために、アンケートを実施した。(音楽専攻の学生31人、及び他学科の学生3人の計34人中、アンケートに回答したのは当日の欠席者2名を除く、32人)

以下、項目ごとに結果と考察を示す。

【第一回授業時アンケート】

① 今までに学校の授業以外に合唱経験はありますか？
ある 13人 ない 19人

この授業は音楽専攻の学生がほとんどなのにも関わらず、合唱の経験が授業以外にはない学生が三分の二近くいる。小・中学校の音楽の授業では合唱指導が必要不可欠となるので、本授業でただ合唱を歌うだけでなく、教育現場に立つ前に合唱の作り方を、指導する側からの視点を考えながら演習することは、有意義であると考ええる。

② 移動ド唱法を知識として知っていますか？
はい 22人 いいえ 10人

移動ド唱法の事を知識としてだけでも知っていた学生が三分の二程度いた事は、少しほっとした結果だった。とはいえ、教育指導要領に明記されているはずの移動ド唱法について、音楽を専攻しているにもかかわらず、知識としてだけでも知らない学生が10人もいるという事は、改善していかななくてはならない問題だと考える。

③ 移動ド唱法で歌った経験がありますか？
はい 4人 いいえ 28人

これは、想定していた結果だった。日本の音楽教育の授業の中では、移動ド唱法の内容を説明することはあっても、移動ド唱法で歌わせる授業をするという実態は少ないのが現状である。また、移動ド唱法を小・中学生に理解させるだけの時間が取れないというのも今の日本の実態だと思われる。

④ 移動ド唱法は難しいと思いますか？
はい 27人 いいえ 5人

日本の現状では、「固定ド」による指導が定着しており、その教育の中で育った学生たちは、「ドレミ」が調によって移動するという事が、やはりかなり難しく感じるのだと思われる。理論の事を良く知らない学生にとっても、難しいものだという先入観があるように感じた。

<どんなところが難しいと思いますか？>

(自由回答)

- ・ドの音じゃないのにドと言わなくてはならないところ。ドじゃないじゃん！と思ってしまう。
- ・楽譜に書かれている音と歌う音が違って脳が混乱するから。

【最終回時アンケート】

① 移動ド唱法について、以前より理解できたと思いますか？
できた 18人 ややできた 14人

選択肢を、<できた・ややできた・どちらともいえない・ややできていない・できていない>の5択にしたのだが、全員がプラスの答えになった。全部で10回程度の短いエクササイズを続けただけなのだが、全学生が少しでも以前より理解できたという事は、今後も継続してトレーニングする意義があると考ええる。

② 移動ド唱法を実際の指導に用いてみようと思いますか？

思う 17人 思わない15人

(思うの中にも、部活で指導をしようとは思いますが授業では思わない。高校で指導をしようとは思いますが小学校では思わないという意見も)

短い期間だったのにも関わらず、指導に用いてみようと思う学生がこれだけいた。しかし、指導には使えないと感じる学生が半数いるという事は、やはり授業で10回程度やっただけでは、指導しようと思えるまでの理解に達することが出来なく、指導できるレベル

まで上げるには、引き続き学ぶ機会が必要だと考える。

<p>③ ②の回答に対する理由 <指導に用いてみようと思う理由> (自由記述) プラス意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・移動ドを行う事で以前よりも音程が取りやすくなったように感じたから。 ・移動ドはハーモニーが捉えやすく、合唱指導に最適だともうから。移調転調に対する認識も一掃される。 ・楽譜が読めなくても事前に楽譜上に移動度を示しておけば簡単に実践できると思うし、きれいなハーモニーを作りやすい。 ・ただ歌を歌って表現するだけでなく、音程感を身に付けて幅広い表現が生み出さると思うから。 ・音の機能が理解できるようになると思った。 <p>マイナス意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分ができないし、固定ドに慣れていると気持ち悪いと感じる子もいると思う。 ・音楽を専攻している私たちでも難しかったので、小中学校の授業での指導としては、使うのは難しいと思う。 ・自分がそんなに効果を感じていない。もっと長い期間移動ドの練習をしていたら用いようと思ったかもしれない。 ・小中学生には移動ドの概念を理解させるのがそもそも難しい気がする。
--

以前よりも音程が取りやすくなった、音程感が良くなったような気がするという、一人で歌う時の改善点を述べた学生が多数いた。また、合唱で歌ったときに、他のパートとのハーモニーも感じやすくなったという、プラスの意見を述べた学生が多くあった。それと同時に、指導するには、まだまだ難しいという意見もあった。また、10回程度の取り組みなので、それほど効果を感じていない、まだ移動ド唱法で自分が歌う事が出来ないという意見もあった。

V. 成果と課題

半期の授業の短い時間だけしか実施出来なかったが、将来教員になるであろう学生達に、移動ド唱法の理解を深め、必要性を感じてもらう事は出来たのではないかと考える。実際に初回と前期後半を比べると、もちろん間違える学生もいたが、かなりの学生がスムーズに移動ド唱法で歌えるようになっていた。そして、移動ド唱法で歌った後に歌詞で歌うと、音程感が良く歌えるようになっていたと感じた。そして、各パー

トの音程感が良くなるとともに、ハーモニーにも敏感になっていったような感じが受けて取れた。アンケート結果からも、音程が取りやすくなったり、ハーモニーが捉えやすくなったという声があがった。

しかしながら、卒業後教員になった時に、実際に移動ド唱法を指導に用いてみようとおもいますか?という質問には半数近くが思わないと答えている。ここからも分かるように、「固定ド」で育った学生たちにとって、移動ド唱法の読譜が難しく、今回使用した楽譜では音符の上に「ドレミ」が書いてあるので、それを使えば、書いてあるまま歌う事はでき、重要性も理解することがある程度できた。しかし、小・中学校の指導に実際に応用して使えるほど習得できていないという事だと思われる。今回の試みは、移動ド唱法を合唱指導法に結び付けていきたいというねらいであったので、そこまでは到達できていない。本学は教員養成大学であるので、学生達が演奏するだけではなく、指導に用いられるようにするのが最終目的で、それはある意味、演奏するよりも習熟していないとできないことである。今回の実践では一定の効果が感じられたので、今後さらに方法を改善して、実践を継続していきたいと思う。

VI. おわりに

1958(昭和33)年に学習指導要領が告示になって以降、小学校および中学校学習指導要領には常に、歌唱の指導における階名唱については、移動ド唱法を原則とすることと書かれてきた。それにも関わらず、これだけ日本の音楽教育において移動ド唱法が広まっていないのには、指導できる土台が培われていないと考える。

もちろん、前述したように、移動ド唱法にもデメリットはあり、転調の多い曲や無調の曲には固定ド唱法で歌った方が向いている場合もある。また、楽器を指導する場合は、「固定ド」で指導した方が適している。しかし、指導要領にも明記されているように、相対的な音程感覚を育てる、しいては音楽性を育てていくためには移動ド唱法を歌唱時に用いることは非常に有用な事である。そのためにも、移動ド唱法を用いて歌唱指導や、合唱指導ができる音楽科教員が育っていかなくてはならない。

今回、合唱の授業半期を通じて移動ド唱法を取り上げたのは私にとって初めての試みであり、学生たちは、その限られた時間の中でも、難解なことに精一杯取り組んでくれた。今後も、合唱の授業や、四年次にある合唱指導法の授業などにも取り入れて、この実践を続けていきたいと思う。

文献

文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説音楽編」教育芸術社
松下耕（2017）「合唱のためのエチュード」導入書 演奏

のための手引き パナムジカ
松下耕（2017）「合唱のためのエチュード」①
パナムジカ

（2022年9月26日受理）